

heisei16

# 六花

*Rikukwa haikukai*

12

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba  
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki  
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana  
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho  
風 ohdako no orikite kusa no iro to naru  
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura  
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku  
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi  
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana  
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka  
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri  
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryoyaku ni

*designed by Asuka*

訪  
戴



山田六甲

林檎来る津軽の風の詩のごとく  
柿剥いて呻吟の智慧さづかりし  
年の瀬や合戦もせず木からも落ちず  
申年の世間は荒れて年の暮  
落款の鶏血石や義士祭  
字が下手になるがうれしや十二月  
三時間我を忘れて年つまる

この役立たずの筆め年の末  
電話せずメールも打たず師走かも  
この頃は頭痛持ちなる年の岸  
百歳の女房年上大節季  
三つ指をついて茶の湯の年送る  
還暦も半ばをすぎて年惜しむ  
数へ日を数へても日の増えもせず  
干し柿のやうな俳人誰と誰  
愛犬が五匹になつて大晦日

鐘音

鳴 海 清 美

くすみたる鯉の鱗よ夏の果  
鐘音の波うつてをり秋近し  
立春の卓に割りたる箸匂ふ  
稲妻に刺されてゐたる思案かな  
瞬きのひとつ惜しめり流れ星

七五三

中 村 房 江

手になにか隠してをりぬ七五三  
柎の花ながむるに肩すぼめ  
雪とけて一本の棒横たはる  
一切を投じ了へたる焚火かな  
煮ふくめて煮つめて十二月逝かす

被災地n

松 山 律 子

余震来る被災地にお座成りな計画  
凍てつく被災地花鳥調詠なんじゃいな  
雪女郎 階段 国道横切つて  
クリマスカロール第百九十二番  
寒波来る 海の上にある国道

葡萄

二 瓶 洋 子

涼しさや夫を外れたる風の筋  
遠霞む 飯 豊 連 峯 墓 参り  
鱗雲月を真中に広ごれる  
割安の葡萄種持つ種も呑む  
教へ子の肴にされて温め酒

# 橙木集



オルゴール

梶浦玲良子

鶏頭の火照りや闇のよどみゆく  
霍乱のポストが眉を落しけり  
同行二人いくにちかかる青山河  
俺々が豌豆の実を摘みに来る  
オルゴールから千人針を母の盆

赤と白

角田 信子

たかがキスされどキス曼珠沙華百本  
白い曼珠沙華 私高いわヨ  
若くないもう若くない曼珠沙華  
バランスの崩れて白い曼珠沙華  
曼珠沙華赤いドレスに少しあき

鯛雲

木内美保子

城山になだれ込みたる鯛雲  
秋燕の一閃瀬戸の空かすめ  
地芝居や塗りつぶされた日焼顔  
鐘撞けば音色連れ去る秋の風  
ありがとう云ふて逝きけり婆の秋

橙木集から

吹かれつつ昼は寝てます白粉花

K O K I A

白粉花は別名「夕化粧」というように夕方近く花がよく開き、白粉花の名前の由来は黒い種子を割ると中に白粉質胚乳があり、それが白粉のようだということから来ているという。花の期間は長く晩夏から晩秋まで咲くが季語は「秋」。この句の面白いフレーズ「吹かれつつ寝ている」ということで、謂わば昼寝をしていると思うのだが、昼寝と云えば夏の季語になるからそれを避けた表現を使ったことの努力賞。

# 菜根譚



## 山田六甲

秋草に座して摘みたる秋の草

笹村 政子

秋草を摘むという風習があるのかどうかわからないが、多分ないと思う。春だったら七草摘みで座って摘むことなどないだろうから多分に座っていて何気なく手に触れた草を摘んだと想像しよう。そこでふと作者は自らも秋草に座っているではないかということに気が付いたところを詠んだのが佳い。言わずもなだが、秋草のよろしさは名草ではなく名もない野の草であること。

蕎麦の花影が留守番してをりぬ

武田 美雪

「蕎麦の花」で切るのか、「花影」で切るのかによつ

ておおいに違った解釈になるのだけれど、定型のリズムでいけば蕎麦の花で切るのが穏当ではあるが、あえて花影が留守番しているとすれば、とここまで考えていやいや定型で読めばいいと気が付いた。

切り方で解釈が違って来るといいうのは間違いで、どちらで切っても花の影には違いないのだ。などと解釈・鑑賞の迷路に入りこみそうだが、そこがこの句の広がりだろう。

としよりの日やよぼよぼとしてられず 池崎るり子

この句には仕掛けがあつて、「年寄りの日やよぼよぼ」としてみせる「澤井我来」の本句取りといえよう。澤井我来は現在白寿で現役俳人だ。澤井一流のおとぼけを詠んだ名句をふまえて、池崎は掲句のように詠んだ。その気概が、彼女の俳句を大河が流れる如く泰然としてみせる。池崎俳句を皆が佳いと感心する所以である。

右顧左晒せず自らの信念を貫くことは実にむづかしい。俳句はこの人のように淡々と進めるのがいい。壁に突き当たったからといって結社のせいにしたり、指導者のせいにする人がいませんように。

辻斬りに出遇つたような彼岸花 中野 哲子

彼岸花がきつといたずらつ子になで斬りにされていく風景か、もしくは草刈り作業で彼岸花も無惨に切り払われたのだろうか。それを「辻斬りのよう」だ、と詠

んだ。

私だつたら、きつと比喩にせずに「辻斬りに遇つた」と断定的に詠むのだろうが、作者はやはり女性の優しさか、断定を避けて「ような」と詠んだのである。断定にしても比喩にしても無惨さは変わらない。作者の憐憫の心が働いている。

キスすればおむつの匂ふ昼寝あと 三井 孝子

キスがいわゆる男女の間のキスではないことは「おむつ」で判る。赤ちゃんだ。赤ちゃんが昼寝から目を覚ましたのだ、母親もしくは祖母が赤ちゃんにキスをした。そのとき襁褓からオシッコの匂いがした。「臭い」ではなく「匂ひ」だ。ああ赤ちゃんだあ、と感激しているのである。感動しているのである。いっそ食べてしまいたいくらいだと思つているのである。僕も六花の皆さんを可愛い赤ちゃんだと思つている。食べたいとは思わないけれど…。

若くないもう若くない曼珠沙華 角田 信子  
オルゴールから千人針を母の盆 梶浦玲良子  
地芝居や塗りつぶされた日焼顔 木内美保子  
藍浴衣帯結ぶ手に父をふと 宮森 毅  
蝸牛よけて農具を運びけり 物江 昌子  
紅白の夾竹桃よ一ノ谷 市川伊團次  
熟るる稲ぐりくる風深呼吸 岩松 八重  
夜なべして後ろの山の眠られず 貝森 光大

鉦叩離婚届の話など

十字架を背負へるは神原爆忌  
草叢に目玉だけ出る蝗虫かな

和太鼓の息よく合ひし祭髪

秋の浜左手で角人の名を

土用明万年筆の掠れ文字

日矢遠く砂金のごとし糸のこぐさ

六花集から

帰り道なくてもよしと花野原

紅さして夫を迎へに星月夜

秋風の水面笑うてをるやうな

曼珠沙華一輪咲きて庭広し

線香の紫煙の涼し一周忌

かなかなや朝はまた来るまた来ると

角材に大工の符丁芋嵐

今宵からいや昨日から月涼し

白露かな白湯の匂ひを手に包み

極楽へゆく道すから敬老会

現世は彼は誰時ぞ秋彼岸

行く夏や無罪放免とはならず

遠野路は鳥語を語る秋の人

打ち水に誘はれたるや風の道

肝心のところは云はず吾亦紅

台風が魔球をおぼえ新コース

励ましの裏目に出たるクリスマス

赤松有馬守破天龍正義

出口 誠

小田 元

田中 武彦

西塚 成代

馬場美智子

松下 幸恵

松本文一郎

水谷ひさ江

金一封嬉し佗びしい敬老日

隣家より子の音読や遠青嶺

秋雨や前も後ろも草千里

秋雀夜明け前より鳴きにけり

貯金箱少しも増えず休暇明

秋の空新規事業に意欲増す

安保 信子

大上 保子

田尻 勝子

霜寄恵美子

三村 昭子

市成 照一

林 裕美子

中谷喜美子

射場 智也

延川 笙子

佐原 正子

ことり

新井 裕

菊谷 潔

近藤 貞子

松本 安弘

山の 狸

平井 滯子

延川五十昭

永田 勇

横山 迫子

会員作品

中谷喜美子

# 六花集



林 裕美子

射場 智也

とんぼうのぶつかりてはじかれて飛ぶ  
土塀に残像残すとかげかな  
星明り胎児の形に夫眠る  
帰り道なくてもよしと花野原  
本棚に手つかずの本水澄めり

母になほ決意促す敬老日  
新しき道出来てをり曼珠沙華  
紅さして夫を迎へに星月夜  
心臓のやゝ不規則に秋の雷  
北向きの厨の窓に秋の訪ふ

秋風の水面笑うてをるやうな  
秋ぐもり人と会はずに済みにけり  
群とんぼきつと水より出たばかり  
新しく畝立ててをり葛の花  
竹の春風来坊と云はれけり